



平成8年 OB戦の渡辺三明先生



平成3年のOB戦 練習試合前のあいさつで（トレードマーク？の緑も見えます）



## 三明先生と野球と私

昭和45年卒業 加嶋 憲一

それは薬学部がまだ昭和町にあったころのことです。入学まもなく（S.41, 4月）全学のオリエンテーションに続き薬学部のオリエンテーションが薬学部で開催されました。私は野球が大好きなので、大学では必ず野球をすると決めておりました。しかし、全学の野球部に入るか薬学部の野球部に入るか迷っておりました。オリエンテーション後、薬学部内の食堂で昼ご飯を食べていたところ、なつかしい関西弁が私の耳に入ってきたのです。大阪から長崎へ一人でやってきた私は、少しホームシックにかかっていたので、とてもなつかしくついその人に声をかけました。すると、「えー、あんた大阪なん、俺京都出身や、それでもうクラブ決めたんか。まだやったら野球部に入ってよ、午後から練習あるから見学において」が三明さんとの最初の出会いがありました。

当然三明さんのペースで即日入部決定がありました。我々がお世話になったのは三明さんが4回生から院生の頃되었습니다。練習をつけてくれるのですが、そのコーチングは研究者の割に理論的でなく、かといって根性一本やりでもなく、どちらかというとブタもおだてりや木に登る的な指導がありました。そのせいか成績は別として、チームのまとまりは良かったように思います。マナーに関してもどちらかというと厳しくしつけるのではなく、自分自身が範を示し実践されていました。先輩に対しての礼は尽くされても、後輩の我々にはそれを強要されず、逆に厚い愛情を示して下さいました。それゆえに皆様からずっと変わらず、三明さんの愛称で呼ばれているでしょう。

またこんなこともあります。今度は私が主将で先生が監督の時でした。部員が20名に近くなったときのことです（入学定員数が40から80名に増加のため）。これまで部員数が10名を少し越える程度だったので、試合には全員出場できてたのですが、そうはいかなくなっていました。そこで、私は学年無視の実力本位でレギュラメンバーナーを決定する方針を打ち出し、監督の了承も得ました。しかし、これは部内に大きな波紋を呼び、ぎくしゃくした空気を生んでしまいました。私はなす術もなかったのですが、先生はこの修復にものすごく努力され、また補欠メンバーに対する気遣いは人一倍繊細で細やかなものでした。このような繊細さや、他人のために惜しみない努力をされる先生の行動は野球部に止まらず、各方面において發揮されていたことは、容易に想像ができます。お会いするたびに「いそがしくて大変よ」がくちぐせでした。その内容を聞くといつも自分のことより、



他人のお世話の話が圧倒的に多かったです。このようなたぐいまれな人間好きの性格が過労につながったのではないかでしょうか。私は先生に言いたい「なにをチョンボしてるのですか。許して上げるから早く帰っておいで」。

## 「三明さん」と「PASSION」

昭和51年卒業、院昭和53年修了 青野 真

2月26日の朝、級友の田原君から「渡辺先生が亡くなられた」との連絡があった時は、「嘘だろう、あの元気な三明さんが何で…」と呆然となりました。

三明さん（渡辺先生のことを三明さんとお呼びすることをお許し下さい）とは昨年の夏に、長薬同窓会の四国支部長の選任のことで何度か電話でお話したのが最後になりましたが、四国支部長も決まったので、今年は是非、副会長の三明さんに松山までおいでいただき、久し振りに支部会を開こうと松山在住の連中と話し合っていた矢先のことで、残念でなりません。

三明さんとの想い出は、私の青春そのものであり、長崎での6年間を振り返る時、三明さんなくしては語れません。野球部の先輩・部長として、合成化学教室の先生として、また兄貴分として本当に頼れる存在でした。このことは私だけでなく、三明さんと縁のあった仲間は皆、そう思っていたのではないでしょうか。

忘れられない薬学部の研修旅行も三明さんが中心となって進められたと後で聞き、なるほどと納得いたしました。あれだけの規模の行事を企画し、実行にこぎつけるには並々ならぬ御苦労があったのではないかと思います。

また、教室旅行も印象に残る想い出です。合成化学教室はお金を使わず体を使って自然と親しもうと、祖母山や九重等の山々に出かけました。今、当時の写真を前にして、この文章を書いていますが、どの写真を見ても三明さんのあの何ともいえないなつかしい顔があります。涙が自然に出てきます。でもこの涙は悲しみだけの涙ではありません。なつかしい、ありがたい感謝の涙もあります。

合成化学教室では、学業を除けば（非常に反省しています）本当に充実した日々を送らせていただきました。夏休みが終わる少し前に、早めに長崎に帰り教室に顔を出すと、茶色のランニングシャツを着た三明さんが「おお、青野、元気！」と声をかけられ、「ああ、長崎に帰ってきたなあ」とホッとした気持ちになったものです。また、教室の実験の合間にねって、本当によくソフトボールや野球をしました。そこで一番ハッスルするのが三明さんでした。投手の時はあの独特な変則サイドスロー、バッターの時はあの独特な首とバットをねかせたフォームで私達学生と真剣に打率を競ったりしました。その姿が今でも目に浮かびます。

三明さんは研究でも遊びでも何をやるにも本当に真剣でした。野球部に入ってすぐの歓迎会か何かの時に、三明さんから「ドクトルジバゴ」の話と「人生とはPASSION（情熱）だ」といった内容の話を聞いたように思います。詳しい内容は忘ましたが、「PASSION」という言葉はいつまでも心に残っていました。長崎を思い出すとき不思議

とこの言葉が心に浮かんできます。

振り返ってみると、三明さんは本当に「PASSION」そのものの人だったなあ。あのタフな行動力の源が「PASSION」だったんだなあと思います。私にとってこの言葉は、三明さんからの贈り物としてこれからも大切に生かしたい。そして三明さんのような本当に充実した人生を歩みたいと思います。

遺された奥様、ご子息様は、さぞ御無念のこととお察しいたしますが、三明さんは私達皆の心の中にしっかりと想い出を残して下さいましたので、どうか、私達にまたいつでもお声をおかけ下さい。

取り留めのない拙い文章となりましたが、お許し下さい。

## 市川先生の思い出、渡辺先生との約束

昭和51年卒業 板倉 忠則

市川先生は私が大学院の学生の時、熊本大学薬学部の助教授だった。私の熊本での学会発表の日、それまでお会いすることがなかったが、野球部の後輩ということで、昼食をご馳走になった。渡辺先生も一緒にいた。学会発表で緊張している私をユーモアのある会話で激励してくださった。学会発表が終わり、フロアを見ると先生が優しそうに微笑んでおられるのが嬉しかった事を憶えている。その後、野球部の同窓会で何回かお会いした。私は卒業後、縁あって島根医科大学病院に勤務した。大学病院在職中に第1回の日米合同薬学大会がハワイで開催された。その時に市川先生とお会いした。先生から松山賢治先生（現武庫川女子薬科大教授）を紹介された。三人で談笑して飲んだことを昨日のように憶えている。先生にはお世話になった。その後も野球部の後輩というだけでお会いすると優しく声を掛けてくださいました。渡辺先生との思い出は多い。私の良き先輩であり、良き兄貴分であった。渡辺先生との出会いがもしかしたら、私の学生時代もだいぶ色あせたものになっていたかもしれない。

沢山の思い出の中で、やはり最後に渡辺先生と会った日の事が今となっては一番心に残る。それは渡辺先生が機器分析の学会で松江に来られた時のこと。その楽しい思い出は薬学部の大渡氏からの電話で始まった。「今度、三明さんと松江に学会で来るから一緒に飲もう」。それは懐かしい電話だった。渡辺先生が島根に来る。一緒に酒が飲める。考えるだけでワクワクした。早速、松江在住の間瀬田先輩（島根県警勤務、S 47年卒、薬化学）に電話した。松江のことだから、場所の設定は間瀬田氏に一任した。長崎大学薬学部に電話し懐かしい渡辺先生の声を拝聴した。先生は「松江は良く分かるから、店に直接行く」とのことだった。奥様の実家が松江だったことを思い出した。

当日、私が大渡氏をホテルに迎えに行き、店に案内した。間瀬田先輩が笑顔で迎えてくれた。まずは三人で乾杯してのどを潤した。しばらくすると、真打登場となった。渡辺先生があの笑顔で「しばらく、しばらく。板倉君、元気だった？。間瀬田さん、元気だった？。」「お久しぶりです。先生もお元気そうでなによりです。」。そうなんだ、渡辺先生は学生時代からいつも優しい笑顔だった。

飲みながら、渡辺先生と二つの約束をした。一つは長崎大学薬学部同窓会の山陰支部の活性化だった。渡辺先生曰く「山陰支部は動きが悪い。二人で活性化しなさい。」さすが同窓会の副会長を感じた。二つ目は合成化学教室の古川先生を囲む会を出雲で開催することであった。これは私が先生に申し入れしたことだった。先生は大変喜んでくれた。色々な話をして、飲んで楽しい一晩だった。私一人出雲市に住んでいるので早めに帰宅した。今日は楽しかった。じゃ来年、先生との約束を実行しようと心に決めた。

長女の大学進学も決まり、渡辺先生との約束を今年は成し遂げようと思っていた矢先の先生のご逝去だった。先生のご逝去から早や半年が過ぎた。その約束は果たされていない。そしてそのことが私の心に重くのしかかっている。

市川先生、渡辺先生お二人のご冥福を心からお祈りいたします。

合掌

### 三明さん・市川先生の想い出（感謝を込めて）

昭和52年卒業、院昭和54年修了 高田 充隆

長崎での学生生活は私の青春そのものです。そして、それは野球部と薬品合成化学教室の想い出です。さらにもう一言付け加えるなら、それらの想い出のすべてが三明さんに繋がっていくのです。昭和48年に入学した私は、当初、特にクラブ活動にもあまり興味がなく、結局1年間はぶらぶらと学生生活を送ることになりました。2回生になろうとしていた昭和49年の春休み、当時の同級生で野球部だった橋口（故人）と北村がちょうど引っ越しをしようとしていた私のところへやってきて、引っ越しを手伝うというので、布団を車に積んでもらったのですが、着いたところが薬学部の集会所で、ちょうど野球部が合宿をしていたところでした。しかたがないので、しばらく集会所に泊まることになったのが野球部に入部したきっかけでした。それまで、友人といえば下宿の友人か、薬学部の同級生というところでしたが、それ以来、まず、野球部の先輩からはじまり、野球部に関係していた先生方など、急に世間が広がっていきました。の中でも三明さんは、先生でもあり、先輩でもあり、また兄のような存在として、私にはなくてはならない存在となっていました。野球部以外で私の大学生活のもう一つの柱となった薬品合成化学教室での3年間の経験、そして古川先生や木下先生との出会いも、三明さんや野球部の先輩なくしてはなかったものです。この薬品合成化学教室での3年間の経験は一見、現在の私の仕事である病院薬剤師という職業にはあまり関わりがないようですが、このときに古川先生はじめ合成化学教室の先生方や先輩から教えられた科学に対する基本的な考え方方が、今役に立っています。これも結局は三明さんとの関わりがあったからこそだと思っています。

三明さんとの想い出として一番心に残っていることは、とにかく三明さんは野球が好きだということです。野球部が野球をするのは当たり前ですが、それ以外にも合成化学教室でも、毎日対戦相手をさがして年間100試合ほどソフトボールをしていたように記憶しています。また、毎年夏になって高校野球が始まると、毎日松山球場まで観戦に行きまし

た。そして、教室でする話はプロ野球の話。毎年長崎で開催されるOB会に出席したいのはやまやまなのですが、関西に住む我々にとってはなかなか難しく、ここ数年は摂南大学の小井田先生や、中牟田君のお世話で、大阪でOB会を開催しておりました。三明さんはこれにも毎年出席して下さり、私ども関西に住む者にとって楽しみのひとつになっておりました。三明さんの訃報を聞いたとき、まさかあの元気な三明さんがという思いでいっぱいでした。長薬野球部を通して、私の人生にさまざまな広がりを与えてくれた三明さんに心より感謝するとともにご冥福を祈り致します。

また、市川先生は私が学生時代には、ちょうど熊本大学におられる時期であり、直接の接点はありませんでした。ただ、九葉連が熊本であった際に、応援に来て頂いたことだけが、思い出されます。ただし、市川先生が同窓会長になられてからは、近畿支部の同窓会に毎年出席頂き、幹事として大変感謝しております。全国各地で開催される支部同窓会に出席することは大変なことと思いますが、副会長であった三明さんとともに同窓会のために尽力されている姿が目に焼き付いております。平成11年6月19日に長薬同窓会総会が大阪で開催された際にお会いしたのが最後になってしまったことが残念でたまりません。心より冥福をお祈り致します。

### 回想 一三明先生を偲んで一

昭和52年卒業、院昭和54年修了 松野 康二

本年二月末、三明先生の突然の訃報に接した時は、晴天の霹靂というか、嘘だろうという思いでした。前年の六月、今私が勤務している大学に来られ、一緒に酒を酌み交わしたばかりでした。その時は、長崎大より九州女子大に赴任されていた柳原先生と三人で長崎の様子やお互いの研究等を肴に話の花が咲き、相変わらずの熱弁を振られておられました。

私は大学四年（昭和51年）の卒業研究時に、同級生7人（男性4人：北村君、高田君、安河内君、大木（筈田）さん、女性3人：田中（入山）さん、大木さん、今泉（三苦）さんと共に、合成化学研究室に入りました。当時の合成は、古川先生、木下先生、三明先生とM1で菅原先輩、青野先輩がおられましたが、私は、三明先生の下で、当時の研究テーマであったイオウイリドに関する研究をお手伝いすることになりました。具体的には、Thiabenzene 1-oxide 誘導体と Acetylenedicarboxylate との反応に関する研究でした。そんな中、反応生成物として予想してない（？）化合物が得られた事がありました。その時三明先生は、私を横において、その物質の構造や生成機構に関する考察を、一研の床にチョークを使って、熱く熱く語られました。横にいた私は、それを聞きながら、先生の研究に対する姿勢と情熱の大きさに圧倒されつつ、深い感銘・感動を受けておりました。この研究結果は、後日 HETEROCYCLRS (Vol.6, No.11, 1781-1788, (1977)) に発表されました。この論文は、私も共同研究者の一人としていただいており、今となっては、三明先生との唯一の共著論文になりました。形見として、大切にしたいと思っています。

その翌年（昭和52年）、三明先生はカナダへ留学されることとなり、院へ進学するこ

とになっていた私に「指導できなくなつて申し訳ないが、がんばれよ。」と言われ旅立されました。二年間の留学を終え帰学された時、私の方は就職していて、すれ違いになりましたが、その後もいろいろな面で御助言頂きました。これからもまだまだ、教えていただくことがたくさんあると思っていましたが、それができなくなり残念な気持ちで一杯です。

三明先生との思い出は、まだまだ数限り無く浮かんできますが、昨年三月に三明先生に私の研究に関連する論文の送付をお願いした時の返事の電子メールを紹介して筆をおきます。やすらかに、お眠りください。

合掌！

《1999-3-19 付の e-mail》

松野康二様

御無沙汰失礼。文献、下の2つは、ありません。直ぐにコピーいたしましたので、送付いたします。合成等、なにかあったら、言ってきて下さい。17日に九州工業大学でセンターの会議があり、行ってきたところです。4月から私の大変親しい友人の榎原隆三先生が九州女子大の栄養学部（？）に行きます。4月に私も当地にいき、産業医科大学にもご挨拶に行く予定にしています。日程未定。4月から、私は研究科委員会のメンバーになり、天然物構造化学の分野名（教室名）にて、コミットすることになりましたが、現状はまったく変わっておりませんで、義務ばかりが増えております。榎原先生とは共同で研究を行っておりました。もちろん、有機化学や合成のみ、私が引き受けおりました。折尾の方に行っても、貴君の助力も借りて、共同でなにかができるれば幸です。またね。

追伸：薬学部は図書館も縮小しています。移転の問題も解決なく、独立専攻科もできましたので、スペースがまったくありません。文献の下2つもすこし、わかりません。

渡辺三明

## 渡辺投手と市川投手の思い出

昭和52年卒業 大木 豊

小学5年生から高校3年生まで柔道一筋でやってきて、高3の長崎県高体連個人重量級で準優勝した。大学生活に慣れて、アルバイトが決まつたら柔道部に入ることに決めていた。高校の先輩からも誘われていた。が、薬学部野球部に入部した。3年生の尾上（現板倉）さんから、家庭教師のアルバイトをすぐに世話してもらったからである。しかも相手は、一つ年下の女の子。礼節を重んじる柔道家として、野球部へのお誘いを断ることができなかった。

当時まだ人気のあった「巨人の星」の登場人物に因んで、長薬の伴宙太として渡辺先生に紹介されたのが、三明先生との最初の出会いであった。

ポジションは当然キャッチャー。男の部員数は九人ぎりぎりだったので、試合にはすぐ出してもらった。何しろ、柔道一筋できたわけだから、当時は野球の事は常識程度も知らなかった。もちろん、キャッチャーとして試合に出るようになったからルールは必死で勉強した。後になって、三明先生から「笠田（そのころの旧姓）、おまえ、ほんま野球知らんかったなー。」とあきれられた。ルールは何とかわかつてきたが、捕球はなかなかうまくならず、バスボールが多かった。ところが、これだけはずいぶん後になって知ったこ

とだが、バスボールとワイルドピッチがあるということ。捕球できないのは全て自分が悪いと思い込んでいたが、今思えばそうでもなかつたような気がする。元々捕球が下手なくせに投手の悪口を言うのは気が引けるが、ワイルドピッチも相当あったと思う。（投手をされた、先輩、同輩、後輩の皆さんごめんなさい）

その点、三明先生の投球は良かった。フリーバッティングではよく投げてもらったが、コントロールが良く、素直な球で打撃練習にあってこいの投球だったと思う。キャッチャーとしては非常に楽だった。他の投手の時のように、「ストライクだけ打つとぞ。」とバッターにアドバイスする必要はなかった。

市川先生の思い出としてすぐ思い出されるのは、なんと言つてもあの真っ赤なユニフォーム姿である。還暦の御祝いに大学病院の野球仲間から贈られたそうで、その姿でO B 対現役の親睦試合にも何度も登板された。赤いユニフォームを着られる前から捕手を勤めさせていただいたが、さすが、高校野球経験者だけあって名投手であった。コントロールばっちり、変化球も良かった。私が受けた投手の中では、先輩、同輩、後輩には悪いけれども、なんと言つても最高の投手であった。

市川先生には、県職員として薬務行政に携わっているときに非常にお世話になった。薬事審議会、薬種商試験委員会等の用事で教授室に訪ねていくときも、野球部の先輩とすることで仕事がしやすかった。と、こちらで一方的に思っていた。市川先生は、誰とでも同じように接しておられたと思うが、初対面の人などはあの偉大な市川先生と仕事の話をに行くことは、かなりプレッシャーがかかっていたようである。

今年の一月に市川先生が、二月に三明先生が、相次いで亡くなられた。今頃、天国でお二人は、野球の話、薬学の話、お酒の話などをあの素敵なお笑顔で話されているような気がする。ご冥福をお祈りします。

合掌

## 市川先生と渡辺先生の想い出

昭和53年卒業、院昭和55年修了 中牟田 弘道

市川先生とはじめてお会いしたのは、九薬連大会（昭和52年？）が開催された熊本大学薬学部のグランドだったと思う。市川先生は当時熊本大学薬学部の助教授であったが、熊本大学との試合では、我々のベンチ横に腰を下ろし応援していただいた。しかし、我々は先生の期待には応えられず熊大に大敗てしまい、試合途中に先生の姿がベンチより消えてしまったことを鮮明に記憶している。卒業後、同窓会等で先生にお会いするたびに、一度お詫びしなくてはと思っていたが、その機会を失ってしまったことが大変残念である。

渡辺先生には学生時代、実習および野球合宿等で指導していただいたが、思い出は学生時代よりもむしろ卒業後、特に近畿で長薬野球部同窓会を開催したこの5年間位に多い。大阪で就職後、長薬同窓会の近畿支部会に参加しながら何となく物足りなさを感じていた私は、ある時、渡辺先生に「近畿でも野球部同窓会を開催できませんかね」と半分冗談混じりで相談したところ、「いいね、俺も参加するから是非やれよ」と、近畿在住の野球部同窓生の住所録と共に会の開催について貴重な助言をいただいた。また、先生自身も毎回

遠路長崎から参加いただき、試合後の懇親会では長崎の盛りだくさんの情報と同窓生の近況などを先生独特の親しみ深い口調で話され、「野球の試合よりも渡辺先生に会えることが楽しみやね」とて話していた同窓生も少なくないほど会を盛り上げていただいた。おかげで、会を通して多数の同窓生と知り合え、今、近畿で同窓生の有難みを実感している。

市川先生と渡辺先生は長薬野球部同窓会を大切にされその発展に長い間尽力されてきた。昨年大阪で開催された長薬同窓会総会と両先生を囲んだ二次会では、野球部同窓生の輪の広がりとその強さを充分に感じられた。我々は両先生の意志を大切にし、今後も同窓会の発展に務めていかなければならないと思う。

### 渡辺三明先生の想い出

昭和55年卒業、院昭和57年修了 吉田 泰史

今年2月末の突然の渡辺三明先生の訃報がいまだに信じがたく、今でも「よおー」と軽く右手を上げて私達を出迎えて下さるような気がしてなりません。三明先生の想い出はたくさんあって、何から紹介していいかわかりませんが、その、ほんの一部になりますが、これから紹介させていただきます。

私と三明先生との出会いは、私が長薬野球部に入部したその日からで、野球部員として6年間と、大学4年から院の合計3年間は、薬品合成化学教室において直々に、さらに卒業後も今までずっとご指導下さいました。

さて、三明先生の好物と言えば皆さんご存知のビールでして、当時合成の教室では夕方5時をまわるころからよく飲み会なるものが週1回以上のペースで開催されておりました。私も嫌いなほうではありませんので、大学1年生の頃からよく顔を出しておりましたが、ビール片手に、最後は三明先生の熱弁ぶりがなつかしく思えます。学生思いの先生は自分の方から心配されて、将来のこととか、人生観などさまざまなことをアドバイスされました。

もうひとつ好きなものがインスタントコーヒーです。一日に4~5杯は飲まれていたと思います。

一方、学生と遊ぶことも大好きでした。学生が大好きな三明先生は、私達学生とよく麻雀をしました。土曜日の午後（当時は土曜には休日ではありません）私より3学年下の渡田君の下宿の部屋で、夜遅くまでやりました。でも家庭思いの先生ですから徹夜などはありませんでした。それから、当時三明先生は外国留学から戻られたばかりで、口癖がありました。それは「グッドやでー」でした。それから、三明先生と子供さんと私で子子川（海）ヘキス釣りに行ったことも良く覚えています。もうひとつ忘れられないことは、教室旅行で大分・宮崎県境の祖母山登山があります。皆で協力しあってリュックが肩に食い込む重さに耐えながら頂上を目指しました。頂上付近の景色は最高でした。木々は樹氷がびっしりついて、風が吹くとサラサラと音をたて、一面雪景色でした。生まれて初めて見る風景でした。登山の素晴らしさを教えてくれたのも三明先生でした。遊びばかりではありません。勉強の方面でも、私達が大学院に進学したいと知るや、私の苦手の英語読解力

をつけるために、毎日早朝から自分と佐原君のために特訓をしていただきました。こんなところにも学生に対する優しさ、熱血漢を感じました。他にもいろいろありますが、これくらいでとどめようと思います。

渡辺三明生は、今頃は天国で、あの市川正孝先生と大好きなビールを飲み交わしながら、お二人で、お互いに野球談義に尽きることなく楽しめていることでしょう。

お二人のご冥福を心よりお祈り致します。

平成12年9月21日

### 市川先生と渡辺先生を偲んで

昭和57年卒業 中嶋 幹郎

(長崎大学医学部附属病院薬剤部)

2000年を迎えた今年も、もう秋の訪れを感じる季節となりました。市川正孝先生が逝去されはや10ヶ月が、また市川先生をまさに追うような形で渡辺三明先生が急死されはや8ヶ月が過ぎようとしています。私は昭和59年春に大学院修了後、今の職場である長崎大学医学部附属病院薬剤部に就職した関係で、これまでずっとお二人の先生にお世話をになってまいりました。特に、市川先生には15年間にわたり職場の上司としてご指導して頂きました。私が初めて市川先生にお会いしたのは、大学病院の薬剤部に就職してちょうど1年が経った昭和60年の4月、市川先生が薬剤部長教授職に就任された時でした。私は在学中から野球部の大先輩が福山大学薬学部に教授でいらっしゃるということを渡辺先生からお聞きしていましたが、その先輩に直接お目にかかる事はありませんでした。最初に薬剤部で市川先生にお会いした時の印象は「厳しい上司」でした。10年ほど前までは、いまでも毎年初秋に開催されている九州山口国立大学病院薬剤部ソフトボール大会に備えての練習で、市川先生とよくキャッチボールをしましたが（野球部のキャッチボールです）、その時も「厳しいコーチ」と練習をしているような感じでした。しかし、その練習のかいあって、当時4連覇を成し遂げることが出来ました。市川先生はスポーツだけではなくお酒もとてもお好きで、私も独身のころ職場の仲間と一緒に飲みに誘って頂きましたが、そのようなリラックスした場面でも、私の市川先生に対する印象は「厳しい先輩」であったことを思い出します。平成5年4月に医学部の教官職になってからは、長崎大学や長崎県病院薬剤師会の中で教育研究面に関する仕事をする機会が増え、市川先生から直接指示を受けることが多くなりましたが、このような場面での私の市川先生に対する印象は「厳しい教授」でした。市川先生には、夫婦で公私にわたりお世話になることが多かったですが、2人ともこのような厳しい市川先生がとても好きでした。私に対して常に厳しく接して下さったことが市川先生の優しさだったと思っています。また、市川先生は渡辺先生を非常に信頼されておられ、市川先生が主催される学会では、毎回渡辺先生に運営の中心スタッフの一人として参加して頂き、薬剤部を助けて頂いたことを思い出します。私は、渡辺先生が亡くなられた夜も、市川先生を偲ぶ会の打ち合わせのため午後9時ごろまで渡辺先生と一緒しており、帰宅後、午前3時すぎに薬剤部の佐々木均先生から

渡辺先生急死との電話連絡を頂いた時には、本当に驚かされました。今はもう、市川先生、渡辺先生から直接教えを請うことはできませんが、これからは、市川先生、渡辺先生との出会いから私が得た財産を、薬学を志す若い後輩達に、特に長薬野球部の後輩達にしっかりと伝えていきたいと考えています。両先生のご冥福を心からお祈り致します。ありがとうございました。

## 偉大なる両先輩との思い出

昭和59年卒業 宮下 孝志

まさかこの様な原稿を書くような事になるとは誰が考えたでしょうか。未だに両先輩のご不幸が現実の事とは思えずこの原稿を書いています。

市川先生とは、私がまだ福岡で勤務していた時、野球部OB会で年に一度お目にかかるつていました。いつのOB会か定かではありませんが、OB同士の試合で「往年の名投手」市川先生が先発なされ、対する私どもは中島（s 5 7 卒）黒崎（s 5 9 卒）ら強打者を擁して対抗したわけです。なんと日頃ほとんど打てない私も含め連打連打の猛攻にて見事名投手をKOした事がつい昨日のように思い出されます。当時私と中島さんは、三共の同じ職場で同じユニホームを着て目立ったせいもあり、市川先生から「三共は非常に生きがい的な」とお褒めに与り、非常に気さくにお話しいただいたことを記憶しています。市川先生の勇姿をもう目にできないことを思うと寂しい限りです。

市川先生の後を追うように他界された三明さん 昨年の長薬広島支部同窓会にお越し頂き、3次会で、糖尿気味で禁煙された事や、息子さんがホンダに就職され頑張られている様子 大学の今後のあり方等熱く語っていました。あの会が三明さんとの最期になろうとは非常に残念でなりません。もっと三明さんに聞いてもらいたいことがあったのに…

三明さんにはよく鍛えていただきました。夏の合宿での三明さんのノックは恐怖でした、縦に横に「飛べー」とヘトヘトになるまでボールに飛びつきました。ところがはっと気が付くとダイビングキャッチが出来るようになっているのです。その時三明さん「ようがんばった ナイスプレー」の一言、それまでの疲れがすっと引くような感動・感激を味わったものです。また三明さんは、シートバッティングのピッチャーもよくやられていました、強靭な体力の持ち主で、更に絶対弱音を吐かない男というのが三明さんの強烈なイメージとして心に残っています。リーグ戦や九薬連での戦い方でも不甲斐ない負けを喫した時、三明さんからの叱咤激励「男やったら格好良く決めてこい」には、何回も自分達の心を奮い立たせてもらいました。私の考え方やポリシーのベースを教えていただいたのが三明さんだと思います。ですからもう一度私の考え方を三明さんに聞いていただきご指導していただきたかったのです。もう叶わぬ事となりましたが、三明さんならどう考えるか・どうするか自分なりに考え行動していきたいと思います。三明さんとの思いでを語れば尽きることはありませんが、この辺で筆を置きたいと思います。

最後に、市川先生・三明先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。  
安らかにお眠りください。

## ソフトボール

昭和62年卒業 松岡 芳樹

現在も、続いているのか解りませんが、私達の学生時代には、毎年恒例の教室対抗ソフトボール大会が、開かれていました。入学当時、野球部の先輩から「人が足りないから、ソフトボールの試合に出てくれ。」と言われ、何も解らないまま、「ハイ」と答え、同級生と2人、大急ぎでグローブ片手に、グラウンドへ走りました。その時、参加したチームが、当時の合成化学教室で、渡辺先生がピッチャーをされていました。先輩に「お前達は若い（当時18才）から外野を守れ。」と言われ、私がセンター、友人のR君が、ライトの守備につきました。対戦チームも試合の結果も、はっきりとは覚えていませんが、試合の途中の守備での出来事です。ライトに平凡なフライが上がり、センターを守っていた私には、ボールの軌道がよく解る為、ライトを守っているR君に「バック、バック」と何度も大声で呼びました。が、しかし、そのR君は、何を血迷ったか、捕球体制に入ると「オーライ、オーライ」と叫びながら、どんどん、前に突っ込んでいきます。ボールは、はるか頭上を越えていき、私がそのボールを追いかけます。ボールに追いついた時には、もうバッターはホームイン、平凡なライトフライがホームランとなってしまいました。守備が終わり、ベンチに戻ると、R君は先輩から「なんしようとや！もう2度と信用せん！」などと、こっぴどく絞られていきました。そこへ、渡辺先生が近づいて来られ「ドンマイ、ドンマイ。気にするな。次、がんばれよ。」と暖かい言葉をかけられていました。その言葉に、R君も多少ほっとしている様子でした。

それから3年が過ぎ、私は4年生となって、薬化学教室へ進み、渡辺先生がピッチャーの合成化学教室と対戦することになりました。3年生の終わりに、不注意で足を骨折していた私が、先生から偶然にも、レフト前のヒットを放つと「おお、走れるようになったか。よかったなあ。」と笑顔で声をかけて下さいました。その言葉が今も、胸に残っています。

そして、1年が経ち、院へと進んだ年の、野球部OB会の席では、市川先生から「研究室に閉じこもらずに、医療の現場に出てきて、もっと顔の見えるところで仕事をしなさい。」というようなお話をありました。その時、渡辺先生は、苦笑いをしながら頭を搔いておられたようでした。また、市川先生には、卒業してからの大学関連の講演会や勉強会の席で大変お世話になりました。威風堂々とされた先生の講演の様子が、今も思い出されます。

最後になりますが、市川、渡辺両先生のご冥福を心からお祈りいたします。

## 渡辺先生との出会いと別れ

昭和62年卒業、院平成元年修了 池沢 竜平

私が、薬品生物工学助教授の伊藤先生からこの原稿の執筆依頼をいただいた時、ある種の不安が浮かびました。勿論、これは大変光栄なことではありますが、「故人を偲ぶ」というテーマが書けるかどうか不安でしたし、私自身、自他共に認める筆無精でして、締め

切りに間に合わないかもしれないと思ったのです。思わず合成化学同期の誰かにパスした  
いなと思いましたが、同時に渡辺先生の「何事も覚悟を決めんばねー。」という言葉を思  
い出し、在学中にもお世話になりっぱなしだったことも考え、覚悟を決めてこの原稿の執  
筆を始めることにしました。なお、私はキャラ的にしんみりとは書けませんので、渡辺先  
生を私なりに明るく想びたいと思います。

#### ○出会い

まず、私が渡辺先生に初めてお会いしたのは長崎大学 薬学部 に入学後、準硬式野球部  
に入部してしばらくしてからでした。その頃、先生は合成化学教室の助手で野球部顧問と  
いう立場だったと思います。私が教室に挨拶に伺った時の最初の印象は活力があるとい  
うか、とにかく忙しそうに実験をされており、私が「今度、野球部に入部しました池沢です。  
どうぞ宜しくお願ひします。」と言うと先生は、私にジロリと一瞥をくれると「おう、よ  
ろしく」と言って、また忙しそうに実験室に戻られたことを覚えています。ほんの一瞬で  
したが、先生の眼鏡越しのジロリとした顔が非常に印象的な出会いでした。

その後、大学4年時に合成化学教室に入り、渡辺先生にご指導頂くようになって、合点  
がいったのですが、初対面の時は、リチエーション反応の真っ最中で、本当に忙しかった  
のだと分かりました。このリチエーション反応は、渡辺先生がカナダ ウォータルー大学  
のスニーカス教授のもとで学ばれた反応で、空素置換下に無水溶媒中、ドライアイス・ア  
セトンで-78℃に冷却し、ブチルリチウムとジイソプロピルアミンを滴下反応させてLD  
Aを生成させ、(私の時は)引き続きオルトトルアミド(またはバルキーなエステル)誘  
導体にてアニオンを発生させ、これを種々のベンゾイル化合物に求核的に反応させるもの  
で、下準備も含め、これを3つ4つ同時にやると、反応追跡用のTLCチェックや終了後の  
カラム精製作業等で1日があつという間に終わってしまう代物でした。勿論、現在の学  
生諸君には数ある基本的な化学反応の一つかも知れませんが、当時22歳の決して優秀と  
はいえない学生であった私にとっては大変新鮮で且つ興味深いもので、14年経た現在も  
未だに忘れていないのは渡辺先生の熱心なご指導があったからだと思います。

さて、そんな忙しい学生生活を送りながら、恐らくは私を含め渡辺先生に関わられた諸  
先輩方および後輩の方々と共に通すると思われる、日々の研究業務が一段落した後のあれ、  
特に真夏の暑い日にやるあれは本当に楽しかったですねー、たまに焼きソバが付くささや  
かなドリンクパーティー。現在は恐らく禁止になっており、今の学生諸君には想像できな  
いかもしれません、当時は非常におおらかな雰囲気があり、研究業務終了後は教室での  
酒盛りOKだったんです。そして、当時の合成化学教授の古川先生や院生の方々も一緒に  
なって、教室のみんなでワイワイガヤガヤ、それはもう盛り上りました。話題の中心には、いつも渡辺先生がいて、時には面白い話が、時には熱い人生論が展開されていたこと  
を覚えています。

例えば、渡辺先生から「その反応は危ないから、ドラフトの中でやれよ。」と言われた  
ご本人が直接ドラフトの中に入って実験をしていた話を聞き、危なかったのは反応ではな  
く、本人だったという落ちに大変才オウケしたという記憶があります(その方のお名前は  
記憶にありません)。また、当時、野球部主将の同期のT君は、よく渡辺先生と学生らし

からぬ話題で熱心に議論していました。例えば、テーマは「結婚は妥協か否か」。渡辺先  
生は「結婚は自分にとって相手が最高だと思ってするものだ」という立

場、T君は「地球上の全部の女性と巡り会っているわけではないから妥協だ」とする立場  
でした。私は「そんなのどっちだっていいじゃないですか。飲みましょうよ。」と言った  
瞬間に二人から「黙っとれ、おまえは。」と一括される立場のない立場で、その後、二人  
は2時間ぐらい延々と議論していました。勿論、結論は覚えていませんが、今となれば、  
恋愛や結婚は主観ですし、地球上の女性と巡り終えるまでには年寄りになってしまふぜと  
いったところが妥当な線ではないでしょうか。

私は、同期のT君曰く、よせばいいのに大学院に上がりまして、その後2年間またまた  
合成化学教室の皆様にお世話になるわけですが、ある日、渡辺先生から、「ボイスカウ  
ト活動の一貫で五島に行くけどT(先輩)と一緒に来ないか。釣りもできるぞ。」と誘わ  
れました。私は釣り好きでしたし、先輩のTさんも乗り気だったと見えて、即OKの返事を  
し、お手伝いすることとなりました。その日、我々一行は福江に着くと更に高速艇で  
黄島に行き、そこでキャンプ張りの設置作業を手伝いました。一段落して、渡辺先生から  
ニコニコ笑いながら言われた言葉に私は驚きました。正確には覚えていませんが、「今回  
の活動テーマはサバイバル。食い物は、米とカレーだけ。夕食のおかず担当は池沢とT。  
他にも何人か釣りするけど、おまえらが釣れんかったら、おかげないぞ。」といった内容  
だったと思います。熱心に作業しているボイスカウトの少年達を横目に見ながら、この  
初めての島で何の情報も無いプレッシャーのかかる状態に対し、内心「先生、マジかよ。  
釣れなかったらやっぱいじないです。勘弁してくれ。」と恨めしく思いましたが、Tさ  
んは「よっしゃ、池沢行くぞ」と早くもやる気モードに入っており、私もその言葉を聞き、  
これはもう覚悟を決めるしかないと思い、急いで釣り場となりそうな磯をめがけて走って  
いきました。あいにく天候も悪く、曇り空で、今にも雨が降りそうだったと記憶していま  
す。かなり心配でしたが、釣り場に着くと、第1投から、魚が釣れ、投げる度に釣れまく  
りました。幸運にも魚群(フェフキダイ)が集まってきていました。その後は、T  
さんも私もここぞとばかり狂ったように釣りました。結局、フェフキダイとシーラの2種  
類しか釣れませんでしたが、夕食のおかずとしては十分量を釣り上げ、ボイスカウトの  
少年達と渡辺先生に対し面目を保つことができました。無論、渡辺先生は念のため缶詰を  
用意されていたようです。今思えば、渡辺先生にはいい経験をさせてもらったと感謝して  
います。

#### ○別れ

何はともあれ、このようにホットな人柄の渡辺先生のおかげで忙しくも楽しい学生生活  
を過ごすことができ、更に古川先生にお世話になった大学院を卒業後、個人的には社会人  
として12年目になり、1人娘も3歳と手がかかるなくなり、一度、渡辺先生のところへ  
遊びに行こうかと年賀状を見ながら夫婦で話をしていた矢先に突然、先生の訃報が耳に入  
りました。

その日は、偶然、4年間の仕事の区切りの打ち上げの真最中で、だいぶ酔っ払っていた私

は、携帯に掛かってきたS君の電話が、初めは冗談だと思いました。私にはどう考へても、あの元気な、しかもまだ十分にお若い渡辺先生がお亡くなりになったというのが信じられませんでした。少し時間が経って冷静を取り戻し、帰路につくと、あちらこちらに電話をかけ葬儀場を確認し、翌日の朝一の便で私は長崎に飛びました。

長崎に着いても、すぐに渡辺先生に会えるような気がしてなりませんでした。しかし、葬儀場に付くと古川先生を始め、懐かしい顔の方々がおそろいになっており、別れを現実のものとして受け止めざるを得ませんでした。ご焼香の時、渡辺先生のお顔を拝見しました。よく言われていますが、本当に眠っているようで、今にも「よう池沢、元気か」といつて起きてきそうな感じでした。私は、祖母の時も、叔父の時も葬儀で泣いたことが無かつたんですが、この時ばかりは泣けてきてしまいました。もっと早く会いに来ればよかったと。かえすがえすも先生に自分の家族を一度もお見せすることなく、お別れとなってしまったことが残念でなりません。

10月14日に開催される偲ぶ会には、私儀、11月に妻が出産予定の為、出席できませんが、本原稿を寄稿することで、少しでも先生のお人柄をご出席の皆様に偲んで頂ければ幸いです。

2000年9月18日

## 渡辺先生の思い出

昭和62年卒業、院平成元年修了 塚崎 雅雄

本来勉強というものが嫌いな性分であったために、3年間遊び呆けて留年してしまい、それでもなお1年間ぶらぶらしていた私を拾ってくれたのが渡辺先生、古川先生であった。合成教室に入る前の野球部員としての4年間は言うまでもないが、教室に入り先生の下で実験をするようになってから先日亡くなられまで、渡辺先生には本当にお世話になり、また影響を受け続けてきた。情熱的、誠実、リーダーシップ。先生の魅力を表現する言葉をあげればきりがない。合成教室での先生はまさしくそれらの言葉通りで、化学実験、実験後の飲み会、野球、釣り、麻雀など、何をするにしても全力で、私達学生はいつもその熱気にあてられていたような気がする。私が有機合成化学に興味を持ち、深く入り込むこととなったのはそのせいかもしれない。教室で実験を始めた頃、化学の知識をほとんど持ち合わせていなかった私はいつも先生にくだらない質問してばかりしていたが、しかし先生はそれらの質問に対し、呆れることも無く実に辛抱強く答えていただいたことを思い出す。それは私がこの道に入っていく上で、とても幸運であった。その後大学院に進んだが、先生と私はよく日曜日の午後に実験室で一緒になった。そういう時は決まって、先生にいれていただいたコーヒーと一緒に飲みながら研究に関する新しいアイディアについて議論したりしたものだった。今思えば、青二才だった私は渡辺先生に1対1で向き合っていただけたお陰で、遅れ馳せながら化学者を目指す上で必要ないろいろなことを短期間に学ぶことができたのだと思う。

大学院終了後の進路として海外を希望していると切り出す時、私は正直言ってまだ早い

と叱られるのではと心配であった。しかし予想に反して渡辺先生は、私の気持ちを理解していただき、すぐにポスドク時のボスであったカナダの Snieckus 教授に連絡を取ってくださった。そして彼から私を受け入れてもよいという手紙が送られてきたときは、自分のことのように心から喜んでいただいた。後に分かったことであるが、博士号を持たない研究員を受け入れることは普通考えられないことであるのにかかわらず Snieckus 教授が私を受け入れてくれたのは、心から信頼している渡辺先生の紹介であったからだとう。カナダに滞在中、Snieckus 教授から渡辺先生の話を聞く機会がたびたびあったが、そういう時 Snieckus 教授はいつも懐かしい良き日々を思い出すかのように顔に笑みを湛え、如何に渡辺先生が素晴らしい研究者であるかを語ってくれたものだった。

3年前に日本に帰国し今の外資系製薬会社の研究所に勤めるようになってからも、渡辺先生とは e-mail でいつも近況や有機化学についての話をやり取りしていた。雑用でとても忙しいとよく言っていたが、4月から学生が来ることが決まってからは、また学生の実験の面倒を見ることをとても楽しみにされていた。先生からの最後のメールにこう書かれていた。「定年まであと5年。でも最後まで手を抜かずに頑張ろうと思います。」その通り、これまで先生は常に何事にも全力投球で手を抜くことはなかった。これほどまで早く亡くなられたことは私にとって悲しみの何物でもないが、それと同時に一人の人間の生き方、るべき姿を私達に見せていただいたことに心から感謝している。

## 渡辺三明先生の思い出

平成5年卒業、院平成7年修了 山田 正紀

(薬品合成化学教室)

渡辺先生との思い出は数多くありますが、とくに教室での出来事が心に残っているのでそのころのエピソードを綴らせていただきたいと思います。

一言で言うと本当によく怒られました。もともと理解力に乏しかった私は失敗ばかり。「絶対こぼすな！！」と言われた強烈に臭い薬品（1滴落としただけでそのフロアーに激臭が充満する）をピンごと倒したり、リチウムを指先で発火させたり、実験手順は間違える、大事な時に外出している…など数えきれない粗相をさんざんくり返しました。はっきり言って、当時はあまり好感はもたれていないかったといまでも自負しています。失敗はよくするものの、それほど打たれ強くない私は、毎回怒られるうちにかなり落ち込んでいました。

そんなある日、先生は「留学していたころは朝6時からみんな実験をしていた。」というようなことを朝のコーヒーの時間に私に話しました。私は失敗だらけの汚名をはらすため、それからしばらくの間、6時とはいきませんでしたが先生が来る時間（7：40ぐらいだったか？）に教室に通いました。でもそのころから、先生はいつもあまり話してくれなかつた私に、次第に笑顔を見せてくれるようになりました。

それからというもの、毎朝の約1時間のコーヒーを飲みながらの先生のお話は、半分ぐらいは理解困難（話が古すぎる・難しすぎる）でしたが、あの独特な関西弁・長崎弁・英

語をドッキングさせたような（「トリッキーさねー」「レコグナーズするやん」など…）

口調でのしょもない話は次第に、同期の森本らとともに1日の日課となっていました。

大学院も残り半年ぐらいのころだったか、いつものようにコーヒーブレイクをしていると、先生は私に「こいつはある意味あたまがいい。それは、自分があたまが悪いということがよく分かっている。」といいました。嬉しいような、腹立たしいような複雑な気持ちでしたが、妙にその言葉が心に残っています。今考えると、あれが普段あまり褒めない三明先生の褒め方だったのかもしれません。

長崎を離れてもう5年以上経ちますが、卒業してからというもの、よく就職のことなどで職場へ連絡してくれたり、同窓会では最近の長崎の状況ニコニコしながら話をしてくれたり、学生時代怒られてばかりだった私を慕ってくれるのはたいへん嬉しいことでした。

今となっては、あの独特な口調やあの笑顔が大変なつかしくおもいます。

『三明先生、本当におつかれさまでした。そして、ありがとうございました。』

### 渡辺三明先生を偲んで

平成5年卒業、院平成7年修了 松元 幸平

2月26日の朝、友人から電話がありました。

その日の晩麻雀をする約束をしていたのでそのことでかな?と思っていたら、電話から突然渡辺三明先生が亡くなったという信じられない言葉が告げられました。体調を崩しておられるということは聞いていなかったし、昨年OB会でお会いしたときもお元気だったので、何かの間違いかもしれないと思っていたところに、別の友人からの電話で三明先生が亡くなり、今日通夜で、明日告別式があるということでした。

私は昨年4年ぶりに長崎に戻ってきたのですが、昨年グビロ会に出席したとき、知らない方ばかりで一人緊張しているところに、声をかけていただき本当にうれしく非常に気持ちが楽になりました。しかも、もう4年もお会いしていなかったのに、目立つ方ではなかつた私の事をいろいろと覚えていて下さったのには本当にびっくりしたと同時に本当にうれしかったです。

本当に誰にでも、やさしく声をかけてくださる気さくな先生でした。今でも、まだ亡くなられたという実感は無いのですが、今年のOB会に参加したときにいつもいらっしゃった三明先生にお会いできない時に、本当に淋しさを感じるのでしょうか。

心から、三明先生のご冥福をお祈り申し上げます。

### 無題

平成5年卒業、院平成7年修了 森本 仁

文中は呼び慣れた「三明さん」と書かせてもらっています。

「四年生」・・・当時（平成4年）薬品合成化学教室には、古川先生、木下先生、三明さんの3人の教官がいました。自分の担当教官は三明さんに決定したのですが、初日から気合がはいっていたのか非常に話が長かったと少し怖かったです。

「タバコ」・・・数年前から禁煙をしていたけど自分が合成に入った時はヘビースモーカーでした。「マイルドセブンセレクト」の灰色の箱がいつも机の上にありました。あと「ロッテグリーンガム」も必需品でした。



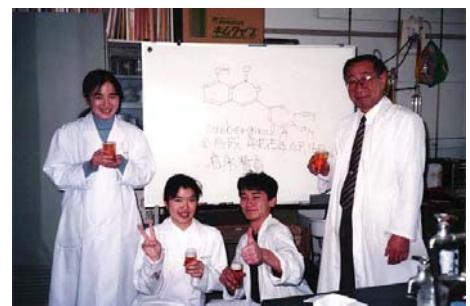
「ビール」・・・酒のなかでも特にビール、特に「バドワイザー」が気に入っていたと思います。ご機嫌に酔っているかどうかは目の角度ですぐわかりました。あと話がさらに長くなりました。といえば実験室の冷蔵庫は薬品とビールで満杯でした。

「野球」・・・「阪神タイガース」ファンでした。タイガース樽酒をうれしそうに見せられた記憶があります。高校野球も好きでした。

「薬学野球」・・・三明さんのノックは結構きつかったです。（練習が終わってくつろいでいるときにフラッと来てすることが多かった）OBから現役までのまとめ役だったので何か会合があるときは嫌な顔せずに率先して働いてくれました。学内でも積極的に学生に声をかけてくれていました。

「歌」・・・カラオケ大好きでした。一緒に飲みに行くと必ずマイクを離しませんでした。一度三明さんに「森本、踊れ」と言われ生まれて初めて女性と踊りました。（店のママさんと）三明さんの歌にあわせて踊るのはいいのだけれど何と歌が5番まであって何で長い歌を歌うのだと少し泣きそうでした。

「合成」・・・三明さんは長年、抗生物質の全合成をメインに研究をしていて（他多数の薬の合成も研究、いくつか全合成にも成功している）自分も3年間一緒に実験してきました。納得のいくデータがとれるまで実験する三明さんだったので量も半端ではなく、厳しい時もありました。一度だけ実験方法だったかNMRの解析についてだったか激しい口論になったことがあります。結局どっちも譲らなかった記憶があ



ります。在学中に全合成は成功しませんでしたが、何年かかっても三明さんが完成してくれる信じていたので非常に残念です。

「学会」・・・何度か学会を一緒に行つたけど石川県の時は一番おもしろかったです。石川県の学会数週間前に全合成に成功した抗アレルギー剤（当時四年生の女の子による）が他の大学のポスターで発表されていた時はさすがに2人で呆然としました。（三明さんは俺達のほうの収率がいいとツツツツ言っていた）2人でガッカリはしたけど、その夜の海の見える露天風呂は最高のながめでした。よほど気に入ったのか三明さんが突然明日もう一泊しようと言ったときは本当にやるなと思いました。おかげで次の日の講義さぼっちゃいました。

「卒業」・・・自分が卒業後は研究室を三階に移し、そこで精力的に実験をされました。何回か遊びに行ったけど在学中と変わらず資料とデータにうもれながら実験している姿を覚えています。家が近いこともあって年に数回程度しか会わないようになり、いつでも会えるだろうと思っていたので卒業したらゆっくり飲みにいこうと言っていた約束を果たせなくなったのが悔やまれます。



厳しい世間のなかハイレベルな薬剤師育成のため、より高度な専門知識を身につけさせようと大学は少しずつかわってきました。当然、勉強や研究の場であって遊ぶところではありません。でもただそれだけというのも何か物足りない感じがして今の大学は少しつまらなくなつたような感じがします。学校のなかでも訪れる場所がだんだん減ってきて、同窓会や同窓会報でしか自分はOBなのだと確認ができないようになってきました。そう考えると三明さんはとてもなく大きな存在だったと思います。

## 渡邊先生との思い出

平成5年卒業、院平成7年修了 千代丸 康重

薬学部に入学してすぐ、新入生の歓迎会のようなものがあり、そこでは、盛んに先輩方が各クラブの勧誘をしていました。私はもともと野球が大の苦手で当時、セバ両リーグの名前は全部はいえませんでした。そんな私ではあったのですが、先輩方の巧みな（？）話術で「とりあえず三明先生のところで話だけでも」ということになって、合成の教室に同期の小浦君と一緒に連れていかれました。渡邊先生とはこの時初めて会いました。この時、何故か鶴屋君は先に来ていて、真っ赤な顔で一杯やっていました。渡邊先生に「おう、ようきたな。まあ、座れ」といわれて、その後何をしゃべったか、今となっては、もう、思い出せませんが、帰りしなには野球部に入部することになっていたことだけは確かでした。

先にも書きましたが私は本当に野球が苦手で、でも何故かピッチャーをすることになり、練習をしていました。そこへ、渡邊先生がやってきて、「振りかぶって投げてみい」と言われ、セットポジションから振りかぶって投げてひどく笑われたことを思い出します。また、ノックをしてもらっている時に、あんまり厳しいので、グローブをグラウンドの外へ投げて「取って来まーす」とか言って、逃げたこともあります。今考えるとなんでもないことをしていたものだと思いました。

野球部では飲み会の回数も結構ありましたが、その中で何回となく、一緒に酒を飲む機会もありました。今思い返して特に印象的のは、新入生歓迎コンパの時に（一次会はいつも集会所でしたが）新入生は当然ですが、先輩の方々なども自己紹介などをやりまして、そのときに「こいつはこんなんやからのう」とか、OBの方で「こんな奴がおってのう」などといったことを三明先生がお話されているのを聞いているときに、本当に愛情を持ってその人たちのことを話していたことがいまでも思い出されます。

学生の時分にはよくわかりませんでしたが、子供もできて一児の父となり、社会人として少しばかりの経験を経てみると、あのように人とつながりを持てるということは本当にすばらしいことだなあと思います。きっとこれからも、野球部を、卒業生を見守っていてくれることでしょう！

## 三明先生の思い出

平成6年卒業 小畑 滋

私は4年生になった時、薬品合成化学教室に入りました。ちょうど古川先生が退官されたばかりで、三明先生と木下先生がお二人で大学院生6名と4年生6名を指導されていました。三明先生は第一研究室、木下先生は第三研究室でした。私は第三研究室にいたのですが、先生方の目が届きにくいこともあって、今考えるとずいぶんいいかげんなことをしていました。毎日怒られてばかりだったことを思いだします。三明先生には野球部でもお

世話になりました。先生のノックはとても厳しく、右中間と左中間の間を延々と走らされて吐きそうになったこともあります。九葉連で優勝したらビールかけをする約束もありましたが、結局（予想通り）できずじまいです。他にも教室旅行で温泉に入つてまわったこと、子々川に釣りにいったことなど楽しかったことがたくさん思い出されます。卒業してからも、私は家が近いこともあって時々大学に遊びに行っていましたが、最近はOB会で会うくらいでした。もっと会いに行かなかったことが残念でなりません。

## 医薬品合成化学教室の朝

平成6年卒業、院平成8年修了 吉本 雄祐

医薬品合成化学教室・第2研究室のホープ吉本が9時過ぎにいつものように合成化学教室に出勤すると、既に渡辺三明先生と岩永梅香あたりが第3研究室（別名お茶室）の椅子に鎮座している。無論三明先生は白衣を着用しており、白衣の汚れ具合から既に反応の一仕込みでも終わっている様子だが、梅香は全く実験をする体勢ではない。うまくいけばコーヒーの匂いまでしている。当然のごとく吉本も白衣を着用はするが、実験の前にお茶室に入り込む。ここからいわゆる「医薬品合成化学教室の他愛もない一日」が始まる。

今日の話題は何だ？ どうも朝のワイドショーで三明先生が仕入れたゴシップネタのようだ。どこぞの芸能人がどうだ、やれ政治家がどうの・・・しかし既に集合している学生二人もこの手の話題にはめっぽう強いものだから、話に花が咲き延々と終わりを見ない。この間サーバーのコーヒーのほとんどがなくなる。三明先生がカフェイン中毒だからだ。なお、サーバー1杯でカップ約6杯分であり、先生好みのアメリカンコーヒーである事を付記しておこう。

そしてこの時間帯になるとたいがい出勤てくるのが青井澄子、早田文子である。彼女達ももちろん白衣は着用しない。いやもしも着たとしても実験の仕込み段階に入る体勢には程遠いのだが、三明先生もそれを咎めるわけでもない。実は第2研究室の木下先生はとっくの昔に出勤しているのだが、ほとんどお茶室には顔を出さない。それを良い事に、さらに話題は展開していく。もちろんゴシップネタ以外、たとえば合成化学らしい実験の話にもなるのだが、3つある研究室の共通話題にはなり得ない。ここは協調性のある三明先生と学生の事、結局話題は次第にお好みの方へ逸れていく。しかし、もちろん誰もその流れを止めるものではない。しかもサーバーに3杯目のコーヒーを誰が指示するわけでもなく入れ始める。たまに三明先生の無言または有言のプレッシャーがかかる事もあるが、良い級友を持ったものだ。

この間、既に吉本が出勤して1時間は経過しているだろうか？ そろそろ合成化学教室の秘密兵器・友田麻夜の登場時間である。三明先生からは9時に登校するよう指示されているものだから、いつもすまなさそうに「社長」出勤して来るのが、彼女を排除するほど寂しい教室ではない。ちょっと嫌味を言われるもの、それをものともせず輪に入ってくる。これも三明先生の下に付いた強みだろうか？

ここで三明先生の機嫌は最高潮に達する。お得意の語りが長い事、長い事。自分なりの

うんちくをこれでもかと学生5人に振り撒き、煙草の本数もうなぎ上り。そろそろ実験を開始しなければまずいのではないかと考え始めるのだが、何人よりも先生の勢いを止めることはできない。いつの間にやら最後の合成化学の戦士・小畠滋氏が出勤しているが気に留める者もおらず、結局お昼までこの語らいは続ぐのである。

こうしていつも教室には、出身地の関西とご当地長崎弁の混じった「ちゃんと実験せんばあかんっさね～」という、朝の語らいの長さとは矛盾した声が響いていた。合成化学教室の雰囲気を作っていたのは、紛れもなく渡辺三明先生であった。私を含めた学生が楽しく1年間を過ごせたのも先生のお蔭であったと言っても過言ではない。この度の不幸を聞きつけ、多くの教室卒業生及び野球部出身者が葬儀及び墓前に駆け付けたのがそれを物語っていたと思う。非常に残念な事ではあるが、長崎大学薬学部で三明先生と共に過ごせた時間があった事は、人生の1ページとして忘れ得るものではない。あらためて「ありがとうございました」とお礼を言わせてもらいたい。

## 長薬野球部のお二人

平成7年卒業、院平成9年修了 宗安 正俊

この度の市川、渡辺両先生の訃報は誠に残念な知らせであった。今にして考えても両先生の元気でプレイするユニホーム姿が今年の野球部OB会でも見られるのではと思ってしまう。

市川先生には、学生時代に講義を受けているはずなのだが、恥ずかしいことに正直言つて想い出せない。たまたま体調不良で休学していたのだろうか？ とにかく市川先生と言えば、真っ赤なユニホームを着てピッチャーする姿が想い出される。当時、還暦を迎えた先生に野球部OB会の場で贈られたものだったと記憶している。いつまでたっても現役のプレイヤーであることは、野球をやっている人間には憧れの姿であった。

渡辺先生については、本当に野球好きな人だなと思った。私が入学した当初、野球部入部希望者数人が合成教室に集められた。何事かと思いきや、早速私達の野球経歴の確認から当時野球部の戦歴、今年こそは九葉連大会で勝たなければと熱く語っていた。また、こんな事も想い出す。大会前に早朝練習を行っていると、ひょっこりやって来てバットを握り締め、いきなりノックを始め出した。そう、これこそが恐怖の“三ちゃんノック（？）”であった。内野手は、一箇所に集められ右や左へ振り回されながら、段々前へ引き寄せられ強烈な打球を浴びせられた。外野手もまた、守備範囲に関係なく走り回された。みんなが疲れ果てた様子を見届け、先生は平気な顔で去っていく。あまりにもヘトヘトで、私達は次の一限目の講義は自主休講したものだった（ほんの一部の学生の話である）。練習試合であっても、勝ったときの結果報告をすると本当に喜んで下さったし、野球以外であっても、野球部員のことには特に面倒をみてもらった。個人で言うと、卒業を控えた年になかなか就職先が決まらなかった時、先生に相談すると真剣に話を聞いて頂いた。「どうしても決まらない時は、ちゃんと仕事先を探してやるから」と言ってもらい、本当に安心したものであった。現在の就職先が決まったと知らせると、喜んで先生の部屋にあったウイ

スキーを取り出し、お祝いにと頂いた。卒業後、野球部OB会に出席すると、「明日の試合は出れるのか?」と早速野球の話であった。  
こうして、両先生のことを想いだしてみると本当に野球大好きなお二人であったと思う。  
市川、渡辺両先生のご冥福を心からお祈りする。

### 偉大なる先生方との想い出

平成7年卒業 赤嶺(平井)貴子・桝田 希

私達が思い出す三明先生は、真剣に実験をしている先生はもちろんですが、ほとんどが笑顔の三明先生です。楽しそうに実験をしている先生、お酒を飲んでみんなとにこにこしながら話している先生。先生は本当に皆さん的事や実験が好きなんだなあと、いつも思つていました。

私達が合成化学教室を希望したのは有機化学が好きだった事もありますが、野球部の先輩方を慕って教室に遊びに行くと、三明先生もいつも暖かく迎えてくださった事も大きな理由の1つです。三明先生はいつも一番早く、私達が教室に着く頃には既にモーニングコーヒーが済んでいました。有機化学が好きとは言っても、それまでは机上の勉強ばかりで、実際の合成に関する知識や実験の方法もほとんどわからなかったのですが、先生はいつも親切で丁寧に指導してくださいました。また、薬学祭や山合宿等、実験以外の学部の行事への参加にも理解していただきました。誕生日の人がいる時はケーキやプレゼントを買うためにちょっと外出…のつもりがかなり遅くなったりした事もあります。どきどきしながら研究室に戻ると、反応終了したナスフラスコは既に次の過程に。このように三明先生にはいつも甘えてばかりでした。試験に失敗した時は「次は絶対大丈夫だから。」と励ましてくださいました。私達が大学生活最後の年を楽しく充実した1年間に出来たのは先生が暖かく見守ってくださっていたからだと思います。

卒業してからは、野球部のOB会で先生方と何度かお会いしました。市川先生の偉大さに私達はいつも緊張していたのですが、世代の離れた私達とも常に優しく話をしてくださいました。私達が大学1年生で初めてOB会に出席した時、市川先生が還暦を迎えた野球部から赤いジャージを贈ったのですが、そのジャージを着て野球をする先生の姿を今でも鮮明に思い出す事が出来ます。三明先生とは最後にお会いした昨年のOB会で「今度宮崎に行った時はおいしい地鶏を食べに行こう。」と約束していたので、それが叶えられなかった事がとても残念です。

私達はお二人からたくさんの事を教えていただき、大変感謝しています。尊敬する先生方をこんなに早く失ってしまったことはとても悲しく残念ですが、これからは先生方を見習い、「何をしてるんだ。」と叱られない様に、後悔しない人生を送っていきたいと思います。

最後に市川先生、渡辺先生のご冥福をお祈り致します。

### 師匠

平成7年卒業 日宇 宏之

私にとって市川先生と渡辺先生は師匠です。私は学生時には野球部、薬品合成化学教室に所属し、卒業後は研修生として大学病院薬剤部で勉強させて頂きました。進路についてアドバイスを受けたり、飲みに連れて行って頂いたりと、先生方には大変御世話になりました。そして、そんなに御世話になった私ですが、一度だけ渡辺先生とけんかをしたことがあります。合成の教室で飲んだ時です。ちょっとした意見の違ひだったので、お酒がはいっていたこともあり、「頼まれてもおまえの仲人なんかせんぞ。」「先生なんかに絶対頼まんから別にいい。」(今思い出すと恐ろしいのですが)と、お互いにかなり熱くなったりそのまま言い合ってその日は別れました。しかし、次の日酔いも醒めて反省し勇気を出して先生に、「昨日はすみませんでした。意見は変わりませんが、先生に失礼なことを言ったことを謝ります。」と言いに行くと、先生は「ええで、ええで。」と、あの笑顔で許してくれました。私は渡辺先生に、人に素直に謝ることと、それを受け入れる寛容の大切さを教わりました。(実験で習ったこともたくさんあると思うのですが、よく覚えていません。先生、ごめんなさい。)

卒業後の大学病院での研修中に、私は医師になりたいと思うようになりました。そのころ、市川先生から自分の研究室に来てみないかというありがたいお話をあったのですが、再受験の話を先生にすると、「君が思うようになさい。思いっきり挑戦しなさい。」と言って頂きました。市川先生は私にとっては雲の上の存在で、その先生から、「頑張りなさい。」と握手してもらったことは、非常に励みになりました。その後なんとか医学部に入れましたが、途中諦めそうになったとき、何度も薬剤部部長室での市川先生との会話を思い出し踏ん張ることができました。

本当に先生方には、数え切れないほど御世話になりました。まだまだ御世話になる予定だったのですが残念です。しかし、これからも師匠の暖かさと教えを忘れず日々精進していきたいと思います。

### 三明先生、市川先生を偲んで

平成8年卒業、院平成10年修了 坂本 明夏

三明先生の突然の訃報を聞いた時は、かなりのショックでした。その頃、市川先生に統いて、お薬を取りに来られていた患者さんや友人のお父様が亡くなり、「三明先生まで…」という思いが強かったです。

ちょうど長崎を離れていて、お通夜、告別式にも参列できず、大変残念でなりませんでした。

大学院修了後はほとんどお会いすることありませんでしたがニコニコされたお顔しか思い出せないので、ほんとに信じられないのです。

三明先生との最初の出逢いは三年生時の実習講義ではなかったかと思います。薬学部に進学しているながら合成系が苦手で興味のなかった私は、その講義もボーッとして聞いていたように思います。それなのに教壇に立って講義をされる三明先生の姿を妙に覚えています。顔をふりながら話す、という、もしかしたら私しか気付いていない癖が何だか印象的だったのです。野球部OBと知ってからも、学校でお見掛けすると、「あっ、顔をふりながら話すMRIの先生だ」と内心思っていたのでした。

その後四年生に進級してからも、ほとんどお話しする機会はありませんでした。大学院二年生の追いコンの時が私が今までで一番たくさんお話をした機会だと思います。ちょうどその頃、私は急きょ他県への就職をやめ、長崎で薬剤師をすることに決めた時期でした。何気なく、みんなと「長崎で仕事を探さないよねー」などと話していると、三明先生が、薬剤師の仕事をしないか、と声をかけて下さったのです。DIか何かの仕事だったと思います。「せっかく院までいっているし、いい仕事だと思うゾ」と勧めて下さったのです。全く考えていなかつた方向に進路変更することになった私は、かなり戸惑い、不安だったし、やる気も失いつつあったのですが、三明先生がそうやって声をかけて下さり、「長崎でも大丈夫かな」ととても励みになり、ほんとにその時は嬉しく思ったのを覚えています。いろいろと考え、結局は薬局薬剤師の仕事を選びましたが、私にとってはとても印象深い出来事でしたので、先生の訃報を聞いた時は、真先にこのことが思い浮かびました。

市川先生も、お見かけするときはいつもお元気そうで、ご病気のことも全く知らずにいたので、とても頑張っておられた姿からは、こんなに早く亡くなられるとは想像もしなかつたことでした。

お二人とも、まだお若くしていらして、本当にこれから、というときで残念でなりません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

## 卒業・就職時お世話になった二人

平成8年卒業 小松 和恵

卒業を間近に控えた大学4年生のころ、私は就職をどうしようと悩んでいました。もともとは薬局への就職を希望していましたが、病院へ就職する人も多かったし、第一、卒業後すぐに就職して、国家試験不合格なんてことにならうどうしよう、と思っていたました。そんな時、大学病院の研修制度のことを知り、これだ！と思いました。薬局就職前に



卒業式

病院の薬剤師というものを見ておけること、薬剤師免許が取れなくても、実習生として受け入れてくれる事、この2点が決め手となりました。実習を行った先輩に聞くと、三明先生が市川先生と仲が良いから知っているだろうとの事。それまでは挨拶を交わす程度だった三明先生の所へ図々しくもお願いに行きました。まだ研修生の募集もされてない頃でしたが、三明先生はにこやかに「明日にも市川先生と会うから、聞いてくよ。一応名前と住所と書いといて」と言って下さいました。私の大学病院研修がその後トントン拍子に決まったことは言うまでもありません。

研修期間中は市川先生に大変お世話になりました。研修が始まり3ヶ月が過ぎた頃、いつものように調剤室で研修していると、突然市川先生から教授室まで来て、と呼ばれました。私は（何事！？）と不安になりながら教授室へついて行きました。そこには高木先生（そのときはどういう方なのか知りませんでした）が座っていました。

市川先生「小松さんは薬局希望だったよね」

小松「はい」

市川先生「こちらは長崎市薬剤師会会长の高木くん、高木くんに小松さんの就職をお願いしようと思うんだが・・・」

小松「あ、はい、よろしくお願ひします」

高木先生「実は僕のところも募集中なんだ」

小松「え、あ、はい、よろしくお願ひします」

そんなやり取りがあり、私の就職先は無事滑石薬局と決まったのでした。

市川先生のおかげで今現在も滑石薬局でお世話になり、早4年が過ぎました。就職してからも何回か市川先生とはお会いしましたが、いつも笑顔で「がんばっているね？」と声をかけていただいていました。今でも市川先生は大学病院に、三明先生は薬学部に行けば、あの笑顔に会えるような気がしてなりません。市川正孝、渡辺三明両先生には、卒業、就職の時期に大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

## 渡辺三明先生を偲んで

平成9年卒業、院平成11年修了 中田 一成

世の中がミレニアムに沸く中、我々長薬野球部にとっては、悲しい出来事が駆け巡った。私が、市川正孝先生、渡辺三明先生が相次いで亡くなられるという訃報を聞くのは、長崎を遠く離れた東北の地のことであった。

私は今、仙台にいる。そこから二時間以上離れた気仙沼という地が、私の働き場所である。その往復の道中、時に両先生のお顔が思い出される。市川先生は、我々平成入学世代の部員にとっては、雲の上の先輩。渡辺先生は、同じ校舎にいる身近な先輩として、指導をいただき、大変に影響を受けたものである。その身近な先輩、渡辺先生、以下呼びなれた三明先生（さんめい先生）と時に呼ばせていただきながら、思い出を綴ろうと思う。

三明先生との出会いは、私が長崎大学薬学部に入学し、同野球部に入部した時のこと

あるから、平成5年の春ということになる。当時、薬品合成教室におられた三明先生のもとに、恒例となっていた“新入部員の挨拶”と、先輩に連れられ、同期の仲間と行った時のことであった。三明先生から、学生生活について、野球部についてお話しがあった後、初めて言葉を交わした。独特の抑揚のある口調での、「中田君、君はなんで長崎へ来たんや？」の問い合わせに対し、「はい。新幹線で参りました。」という私達前後の代の部員にとっては、あまりに有名なエピソードから始まる。（「岐阜県出身の君が、なんでこんな遠くへ？」というのが、三明先生の真意であったのだが。）

しかし、まだこの時は、渡辺先生であった。それが、三明（さんめい）先生となるのは、その数ヶ月後のことになる。三交戦を目標に、練習に励んでいたある夏の日の朝、小林先輩が、「さんめい先生にあった。ノックしに来ると言うから、覚悟せなあかんぞ。」と言われた。「どの先生ですか？」との私の問い合わせに対し、「知らんのか。野球部の先生やないか。」と。そこで、「ああ、なるほど、野球部の市川先生、渡辺先生、伊藤先生の、三名の先生のことか。三人の先生がノックに来るとは、それは確かに大変なことだぞ。」と、全く見当外れなことを考えていたのを思い出す。後にこの勘違いは、また笑い話となってしまうのだが。

その先輩方も恐れた“さんめいノック”により、我々も四年の春の引退まで、鍛えられた。ショートの守備位置から眺める、外野への三明ノックは、“レフト！レフト！レフト！”と、右へ左へ、前へ後ろへ、と連続でガンガンと、鋭い打球が飛んで行く。私も中継に入りながら、右へ左へ、前へ後ろへ、青春の汗を流した。

こういったノックの後には、恒例の三明評がある。忘れもせぬのが、三交戦を目前にした三年の夏、「お前達なら勝てるかもしれない。」という言葉である。その予言通り、また、特訓に応え、見事に“夏の一勝”を挙げることとなる。平成11年の春には、九葉連優勝、その前後の年も準優勝と、好成績を収める我が長薬野球部だが、当時の一勝にはおよそ十勝分の価値があった。その為に、“勝利報告会”なるものを聞いたものであったが、何より三明先生が目を細くして、首を揺らしながら喜んでくれたのを思い出す。その後、ご多忙となった先生が、“三明ノック”に現れる機会が減り、我々より若い世代には、それは、語り継がれるものとなっていました。そんな中、我々は貴重な時を過ごせたものと、時代に感謝している。

三明先生はまた、人として大切なものを、我々に教えてくれた人でもあった。すなわち、我々は、野球部を愛することから、人を思いやることを学ぶ。このことは、いついかなる時も役立つものと、確信している。そういった先生であったから、進路についても親身になって相談に乗ってくれていた。三明先生にお世話をになった者は、野球部員に限らない。私へもまた、「院卒のMRというのも珍しい。いつものように、思いっきりやってみたらええんや。」と。

その言葉とともに、私は、長崎を送り出され、武田薬品に入社する。大阪での研修の後、仙台に配属となった。三明先生の御子息が東北大学にいらっしゃったこと、また、御子息の奥様の実家が仙台の為、時々訪れる事を聞いた。「そこで立ち寄るのが牛タンの～助、何という店だったかなあ？」と言われていた。「では、次回、先生が来るまでに、一番の店を探しておきます。」と、仙台での再会を約束していたのだが。

今こうして、“先生を偲ぶ”を綴っていると、次から次へと、思い出される事は尽きない。長薬野球部の源泉たる市川正孝先生、またその流れを継承され、我々平成世代へと、さらに託された渡辺三明先生。その両先生のご他界は、あまりに大きい。しかし、ここで先生から受け継いだものをもって考えると、我々は、やはり何時までも悲しんでいてはならない。我々が、両先生から得たものをもって、この世界を、自分の人生を、元気に、幸せに暮らすことが、何よりの供養、両先生が喜んでもらえるものと、思えてならない。

三明先生の私への最初の言葉、「中田君、君はなんで長崎へ来たんや？」の問い合わせに、今ならこう答えたい。「はい、長薬野球部に入る為。そこで、市川先生、三明先生はじめ、素晴らしい先輩、仲間、後輩達に出会い、そこで得たものをもって、素晴らしい人生を過ごす為に参りました。」と。

市川正孝先生、渡辺三明先生、有り難うございました。  
心よりご冥福をお祈りいたします。

## 名ノッカー!!

平成9年卒業 平良 文亨

私が学生の頃、夏休み期間の野球部の練習に、必ず顔を出されてノックなどを中心にご指導賜りました。夏の暑い日に朝から練習をし、更に内野と外野に分かれて守備を中心に行なうとしたところ、三明先生が来られて「よーし!!やるかっ!」と言ふ。すぐにノックの準備に取り掛かられました。まず最初は内野ノック。私は外野だったので内野の様子を見ていたら、ただでさえ体力のない我が野球部員たちが右へ左へ揺さぶられ、へとへとになっていました。「やばい!」そう思った外野陣は少し体力を残しておこうと思い、軽めのキャッチボールをしながら待機していました。ところが、そんなことを知つてからはずかしい外野ノックが始まると内野以上の激しいノックが開始されました。「はい次一!センター!!」の合図で、私は厳しいところに飛んでくるボールを追いかけ、やつとの思いでボールを手にしたとたん、「はい次一!センター!!」の掛け声。私は耳を疑いましたが、やはりノックの打球はセンターへ。今度は逆方向へひた走りました。そして次は前へ後ろへ。続けざまに飛んでくる三明先生の渾身の打球が、私たち外野陣を襲ってきます。このような激しいノックが繰り返され、外野陣もへとへとになりました。しかし、このノックが夏休み最後に行われる三校戦へのいい刺激になったことを今でも憶えています。今となつては、学生時代のいい思い出になっています。

OB戦での勇姿を見る事ができないことを残念に思います。最後になりましたが、三明先生と市川先生のご冥福をお祈りしてメッセージに代えさせていただきます。

## 私の良き理解者、三明（さんめい）先生

平成9年卒業 林田 壮一郎

「最近どうや！？」「ほうか（そうか）」。

会えば必ずお声を掛けいただき、いつも心配して下さっていた三明（さんめい）先生。昨年のOB会のときにも、一次会の合間に廊下でいろいろなことを話し、また、相談にものっていただきました。それを見た後輩からは、まるで私が三明先生に説教されているみたいだった、と言われる程でした。それが、三明先生と話をした最後となってしまいました。そのわずか数ヵ月後の市川先生の訃報に続く、三明先生の訃報。今でも信じられないというのが私の本当の気持ちです。今度また長崎に会いに行けば、また、満面の笑みで「最近どうや！？」「ほうか、ほうか」といつもの言葉で、私を迎えてくれそうな気がしてなりません。

三明先生、本当にもういらっしゃらないのですか。まだまだ、話したいことや相談にのつていただきたいことが山ほどあるのに…。

私が三明先生に初めてお会いしたのは、今から7年前の春。長崎大学への入学を果たし、薬学部の茶話会での先輩方からの勧誘で野球部への入部が決まり、先輩に連れられて「合流」の研究室に御挨拶に伺ったときが最初でした。緊張している私達新入部員を前に、「どこから来たんだ？、どうして長崎大学に来たんだ？、長崎大学は…」今思えばいつも調子で「三明節（さんめいぶし）」が始まりました。それが「三明節」を聞いた最初でした。聞いたと言うか聞かされたというか…？今でも、その時の光景がしっかりと目に焼き付いています。それからは飲み会があるごとに「三明節」が炸裂していました。失礼な話ですが、今思えば学生当時は、先生を先生と思っていたのかもしれない自分がいたように思います。いつも気さくに私たちに話し掛けていただき、とにかく何でも話し易かったのは事実です。先生と言うよりも何でも話せる先輩であり、私たちの良き理解者であっていただいたと思います。

そして、特に4年生のときには本当にいろいろお世話になりました。その後の進路について悩んでいたとき、同窓会室の大河内さんとともにいろいろと相談にのっていただきました。お忙しいにも関わらず、長い時間私の話に耳を傾け、親身になってアドバイスしていただきました。就職が決まったときには、何とワインを一本プレゼントしていただきました。学生の私にとって、高価な本当のワインを一本手にしたのはそれが初めてで、とても甘く飲み易く、半分くらい一気に空けて、残り半分は野球部の同期の仲間と飲みましたが、その味は一生忘れることは出来ません。最高の味でした。その後、就職してからも時々先生からお電話をいただき、励ましていただきましたし、結婚が決まったときにもとても喜んでいただきました。本当にうれしく感謝しています。

三明先生、本当にもういらっしゃらないのですか。長崎に行ったときにはつい忘れて、先生に会いに行ってしまいそうです。今まで本当にありがとうございました。先生の今までのあなたかいお気持ちに応える為、これから頑張って行きたいと思います。これからは、遠いところから私たちをあたたかく見守っていて下さい。

## 市川・三明両先生に誓って

平成10年卒業、院平成12年修了 目良 国寛

6年間の学生生活も残り3ヶ月という時に両先生の相次ぐ悲報を聞き、驚きと悲しみでいっぱいでした。お二人には入学以来、野球部行事だけでなく進路相談や就職の際にも大変お世話になりました。私の将来を左右した偉大で影響力の強い先生方であったと改めて感じております。卒業式には6年分の御礼をしよう、社会に出て活躍することでお二人に恩返しをしようと考えていた矢先の辛く悲しい出来事でした。

市川先生とは、キャンパスが違うこともあって年に一度のOB会と卒業式後のパーティーでしかゆっくりお話をできませんでした。しかし、国内外で活躍された先生の講義もしくは病院実習でのお話は興味深く、毎回食い入るように聞いていたのを思い出します。それまで私は実家のある壱岐の島で薬剤師として働くと安易に考えていましたし、薬剤師と研究を全く切り離して考えていました。そんな私に先生は、これから病院薬剤師のあり方や薬剤師といえども研究することの大切さを語って下さいました。迷っていた大学院への進学を決意したのも先生のように薬剤師と研究を両立できる男になりたいと強く思うようになったからです。今は薬剤師としてではなく製薬会社の研究員として頑張っていますが、先生との出会い無くて現在の私は無かったでしょうし、何より仕事に対して今ほど情熱を持つことも無かったのではないでしょうか？ 一からのスタートですが、いつか先生を超えるような男になります。市川先生、本当に有り難うございました。

上記のとおり私は現在研究者として働いています。この機会を与えて下さったのが三明先生でした。先生は野球部の新歓の時、私に用意されたコップ（ポカリスエットの500mLの瓶）に真っ先にお酒を注いでくれました。無理するなと言いつつなみなみと。それを飲み干した時点では私はその日敗北者でした。大学での記念すべき一敗目でした。先生はその後も早朝練習や飲み会に参加して下さり、野球部一同をいつも温かい眼差しで見守ってくれました。私に就職面接の話を一番にして頂いたこと、本当に感謝しています。あの時先生と私はある約束を交わしました。「絶対辞めるな。活躍して長薬の後輩が就職する際、力になってやれる先輩になれ」いかにも三明先生らしい一言でしたが、この約束をしっかりと守るために私は頑張っていきます。

市川先生、三明先生、お二人には感謝の気持ちが尽きません。今後の野球部OB会で市川先生の勇姿や三明先生が赤ジャージを着る時を目にすることができないのは残念でなりませんが、私を含め先輩OB、後輩達の全てが両先生に負けないぐらいに長薬を、そして長薬野球部を愛していることを忘れないで下さい。だから安心して私達の未来を温かく、時には叱咤激励して見守っていて下さい。本当に有り難うございました。

## 渡辺三明先生へ感謝の気持ちを込めて

平成13年卒業予定 長谷 彰子  
(元天然物構造化学教室所属)

期間で言えば、私と三明先生との付き合いはとても短いものでした。数字にして、約2～3ヶ月程度のものです。でも、この2～3ヶ月は、私の大学生活を語る上でなくてはならない貴重な時間であったと思っています。

もとはといえば、三明先生との出会いは、私が大学1年生の時、先生が講義された「化学A」を受講したことに始まります。この時は、まだ先生と特に個人的に話をしたことはありませんでしたが、物質の化学構造が解明されていった歴史などについて、熱心に講義されていたことを思い出します。当時の先生を思い出しても、先生の化学への情熱を感じられます。

次に、三明先生と私が、接点を持ったのは、私が大学3年生で、研究室選びに頭を悩ましている時でした。三明先生は、この年新しく「天然物構造化学」という教室をつくられ、学生も受け入れるとのこと、1年生の時の熱い講義を思い出した私は、友達の鷗田さんと一緒に三明先生のところへ話を聞きに行きました。

初めて話をする私達に三明先生はとても好意的でした。まだ部屋も片付かず書類に囲まれていた先生は、私達が来ると嬉しそうにして、椅子のうえに重ねてあった書類をどけて、私達の座るスペースを確保してくださいました。そして、先生の大好きなコーヒーも入れてくださいました。研究室の話に始まって、私達の将来についてまで、色々な方向へ話が広がり、少しだけ話を聞くつもりが、お昼に行ったのに帰りは外が真っ暗になっていたのを思い出します。

一度話を聞きに行った私達は、三明先生の情熱と暖かさの虜になってしまいました。もちろん、三明先生の教室を第1希望に出したことは言うまでもありません。

以後、研究室の一員として教室に通うようになってからは、三明先生と本当によく話をしていた気がします。特に、将来について悩んでいた私は、先生によく話を聞いてもらつては多くの助言を頂きました。この先生の言葉が、私をどれだけ勇気づけたことか。また、三明先生と私達の3人では、よく年間の遊びの計画も立てていました。「ウニを食べに行こう」「イカを食べに行こう」「湯布院に行って、温泉に入ろう」「阿蘇山周辺は、先生の庭みたいなもんやから案内してやるぞ」などなど。あまりにも、沢山したいことがあり過ぎて「遊びのカレンダーをつくらんといかんなー」とまで言っていました。もちろん、研究に関しても、先生はとても情熱的でした。「8月くらいまでになんらかの結果を出して、九州支部会で発表できたらいいなー」とよく私達に言われていました。

三明先生と過ごした日々は本当に夢のようでした。あのまま、三明先生と1年間を共に過ごせたら、、、と思うと残念でなりません。

三明先生、短い間でしたが、本当にお世話になりました。お忙しい中、時間を惜しまず私などの個人的な相談にのってくれて頂きどれだけ救われたことか。本当に、心から感謝しております。有難うございました。

合唱

## 編集後記

長薬野球部部長  
昭和59年卒業 伊藤 潔

平成12年、西暦2000年という節目の年に、長薬野球部のリーダーとして今日の野球部並びに同窓会を築き上げてこられたお二人の先生を失ってしまった。

秋の恒例行事「長薬野球部OB会」。今年もOB会はあるんだとの想いに至ったとき、お二人の先生へ感謝の気持ちを伝える会にしようという考えは即座に浮かんだ。毎年のようにぎりぎりの連絡で行ってきた最近のOB会であったが、先のことは考えずに、まず開催の案内と追悼集への寄稿を呼びかけた。出席の返信はがきは70通を数えたが、原稿の方の集まりは鈍かった。不安がない訳ではなかったが先輩諸氏からの助言と激励もあり、改めて寄稿をお願いした結果、ご覧のように貴重な写真も交えて素晴らしい文章をお寄せいただいた。ご多忙の仕事の中、突然の原稿依頼に時間を割いてご協力してくださった皆様にこの欄を通して感謝申し上げます。ありがとうございました。